

パラリンピックと知的障害

先般開催されたロンドンパラリンピックは日本選手団の活躍もあり、予想以上の盛り上がりを見せていた。特に金メダルを獲得した視覚障害者の競技であるゴールボールや車椅子を使用している肢体不自由者の競技である車椅子テニスや車椅子ラグビーなどがメディアに多く取り上げられていたようだ。障害者のオリンピックとして世に知られている大会ではあるが、報道の対象となるものはどうしても障害が目に見えて明らかにそれと分かる競技がほとんどであるように思われる。そんな現状もあり、パラリンピックは身体障害者だけの大会(オリンピック)と思われがちである。しかしながら実際には知的障害者の競技も実施されているのである(聴覚障害者と精神障害者の競技は実施されていない)。

知的障害者は、1996年のアトランタ大会で初めてパラリンピックに参加することが認められている(パラリンピック自体は1960年に第1回大会が開催されている)。

しかし、2000年のシドニー大会で知的障害者の競技者にとっては衝撃的な事件が発生した。男子バスケットボールの知的障害クラスで金メダルに輝いたスペインチームに障害者を装った健常者がいた事が発覚したのである。12名の登録メンバーの内10名もの選手がなんの障害もない健常者であったのである。それがのちに内部告発で明るみになってしまったのである。

その結果、国際オリンピック委員会は2002年のソルトレイク大会から、当事国であるスペインだけへの罰則ではなく、大会として全ての知的障害者のクラスを実施しないと決めてしまったのである。知的障害であることを確認することが出来る厳格な新たなシステムが構築されるまでは、先の大会での実施は見送られてしまったのである。

その後2009年に、国際知的障害者スポーツ連盟(INAS-FID)による、障害認定の厳格化等の新たなシステムが認められ、先のロンドンパラリンピックから一部の競技・種目でのみではあるが知的障害者のクラスが復帰を果たすことにはなったが、一国の安易な考えによる不正により、その間12年もの歳月が流れてしまいました。

私自身、このような事態が起きてしまった大きな要因の一つは、多くの知的障害がなかなか目に見ることが出来ない障害であるということが挙げられると思っている。身体障害であれば、車椅子を使っていたり、義肢を用いて走っていたり、一見して障害の有無を判断することが出来るのである。しかし、特にパラリンピックのような競技性の高いスポーツ大会に参加が出来るような知的障害者は、外見から立ち振る舞い、受け答え等、健常者と何ら変わらない人が多く、その障害の有無をすぐに判断することは難しいのである。

そこで、新たにINAS-FIDが構築したシステムの中には、知的な障害の有無の判断だけでなく、それぞれのスポーツの競技特性に準じたテストを受けることが義務付けられたのである。それは、その競技を行うにあたって必要とされる知的及び認知スキル(状況判断や反応時間等)の確認や技術的なテストで構成されている。

パラリンピックも世界の競技者を決めるスポーツ大会であるので、クラス分けの仕方が、障害の分類や特性に重きをおいたものではなく、純粋な競技能力(タイムやスコア等)で決められるべきではないのかと私は考えている。そういった意味でも、この新たなシステムでは、特にこの部分での精度を上げていくことがとても重要なのではないかと感じており、今後注目してみたいと思っている。

また、現状3競技7種目の実施に止まってしまっている知的障害者を対象としたクラスが拡大していくことに期待を寄せると共に、競技スポーツを志している多くの知的障害者が、パラリンピックという障害者スポーツでは最高峰となる大会の場で脚光を浴びる機会が増えることを切に望んでいる。

工藤陽介 (ディセンターウィズ)